

産学医コンソーシアム発足

がんの早期発見治療へ尿でリスク判定

道内3病院など

産学医によるコンソーシアム「クラッシュキャンサー」が発足した。クライフ社が開発した尿によるがんリスク検査キットを使い、がんの早期発見・治療を目指すもので、帯広市の北斗病院（鎌田一理事長、井出渉院長・267床）、旭川市の森山病院（森山領理事長、稲葉雅史院長・232床）、西区の静和記念病院（川上雅人理事長、神山俊哉院長・195床）の3病院と、サッドラホールディングスも参加している。

検査キットは、北斗病院とクライフ社が共同開発した。がんとその周辺組織から放出され、尿中に含まれる微量な核酸（マイクロRNA）から、がんリスクを判定する。マイクロRNAを高効率に収集する技術で、同社は特許を取得しており、収集したマイクロRNAをAIで解析する。対象となるがんは、肺、食道、胃、膀胱、大腸、乳がんの7種で、これまでに検証では感度特異度が90%を超える精度が得られ、Stage1の早期からサブタイプによらず検出できることが分かっている。

3病院ではすでに検査キットを使ったサービスを開始しており、それぞれ男女別に複数のがんを一度に検査できるサービスを展開している。

今後はサッドラが5月を自途に札幌市、旭川市、帯広市の一部店舗で検査キットを販売し、個人でも同検査を受けられるようにする。自宅で尿を採取し郵送すると約2週間後結果報告書が届く。報告書では、リスクの高さのほか、疑いのある症状、リスクの高さに合わせた

生活習慣の見直しや定期的な検診の重要性、結果に応じたその後の検査などについても解説している。

高リスク判定が出た場合の確定診断については、3病院が中心となっており、それぞれの専門性を生かした治療も展開していくほか、臨床研究に協力する。

コンソーシアム発起人の加藤容崇医師（北斗病院）は、「がんの死亡率を下げるのが最終目標」といい、3病院のほか北大と旭医大が診断から治療まで医療技術協力をを行う。

検査の重要性を認識しつつも、身体的な負担や検査の手間を嫌い、後回しにした結果、治療開始が遅れるケースが少な

くない。コンソーシアムでは、尿の採取だけで済むという手軽さから、約200店舗の広域展開を多用し、デジタルサイ



調印式で検査の仕組みを説明する加藤容崇医師（右）と参加機関トップら

ネージ等でプロモーションを行い、啓発に力を入れていく。

また、早期発見だけでなく、そこから早期治療へとつなげる社会的なシステムづくりも視野に入れている。発足調印式で、北斗病院の鎌田一理事長は「がんによる死亡者を減らすことは、当法人の目標でもある。今回の取り組みに期待したい」と話した。

また森山病院の森山理事長は「予防医学に力を入れていく中で、同検査の意義は大きい」と説明。静和記念病院の川上理事長は「高リスク判定の人を効率的に検査に結び付けられる優れたシステム」と評価し、普及への協力を呼び掛けた。